

卒業後の生活から見た自立活動の指導の検証

○貝本 智和
(長崎県立島原特別支援学校)
KEY WORDS : 卒業後の生活

一木 薫
(福岡教育大学)
自立活動の指導

古川 勝也
(西九州大学)
知的障害特別支援学校

本人として充実した生活を送っているとの回答であった。

I 目的

学習指導要領に目標の系統性や扱う内容の順序が示されない自立活動の指導は、教師の専門性がより要求される指導領域であり、個々の教育的ニーズに的確に対応した指導目標の設定に指導の成否が左右される。高等部段階での指導目標の設定では、小、中学部と比べ、卒業後の生活を見据えたトップダウンの視点による指導目標の設定が求められる。しかし、卒業後の生活の実態から在学時の指導を見直す、特別支援学校としての取組は見られない。

そこで、本研究では卒業後の生活に着目し、在学中に自立活動の時間の指導で身に付けた力が生活場面で生かされているかを把握し、在学時の指導目標が適切であったかを検証することを目的とした。

II 方法

(1) 対象者の実態と在学時の自立活動の指導

知的障害特別支援学校に在籍し、自立活動を主とした教育課程で学習した。本研究では、高等部2年時の自立活動の指導について報告する。年度当初は、姿勢を保持する力、150m程度独歩をする力はあるものの、特定の人や場面に固執するなど環境の変化によってそれらの力を発揮できない状態にあった。屋内ではすぐに座り込むなど日常生活で力を発揮できないために、車いすを常時使用していた。また、特定の人であっても相手に合わせて活動することが難しい、極端に興味・関心の幅が狭い等の実態であった。高等部入学時に設定された目指す姿も踏まえ、他者と活動を共にすること、目的の場所や物に向かうことを目指して、指導目標を「教師の『止まるよ』『行くよ』の声かけに合わせて教室間を移動することができる」と設定し、身体各部位のゆるめや促しに合わせた姿勢の保持・変換、目的物への歩行、教材を介したやりとりなどの学習を行った。1年間の指導を経て、「外に行くよ」と伝えると床から立ち上がって歩き出す、教師の歩調に合わせて数m歩く、促しに応じて止まる、教師が進む方向についてくることができるようになり、校内では見守りで教室間移動ができるなど、ほぼ車いすを使用せず生活することができるようになった。

(2) 卒業後の生活の実態把握

対象者が現在利用する施設を訪問し、現在の実態を観察により把握すると共に、以下の①②について、研究発表についての承諾をいただいた上で、施設職員、および保護者から1時間程度の聞き取りを行った。

- ①日常生活で介助を行う際の対象者の実態や課題
- ②余暇活動の実態

III 結果

利用施設では、送迎車からの乗降時や排せつの際に介助者の促しに応じて10m程度の手引き歩行を行っていた。

①については、施設職員は「現段階で困っていることはない」と回答し、保護者も「座り込むこともなく、手引きでの歩行で室内の移動や自家用車への移動等を行えるため、困ることはない」とのことだった。②については、利用施設の余暇の時間には特定のスペースでゆっくりと過ごしながら特定の利用者からの関わりに対して笑顔で応じるなど、落ち着いて生活しており、家庭生活においてもゆっくりと過ごしながら、時折自家用車でのドライブを楽しむなど、

IV 考察

結果から、介助者の促しに応じて移動することができており、座り込んで動かなくなることはないなど、高等部2年時に行った、他者に注意を向けて一緒に活動を行う指導や目的の場所まで移動をする指導が生かされている実態が伺えた。また、余暇についても落ち着いた時間を過ごしているように見受けられた。しかしその一方で、移動には手引きを必要とすることが、特定のスペースで過ごす状況をもたらし、余暇活動の広がりや生活の質の向上を阻む要因となっているとも考えられた。手引き歩行など援助量の増加は運動量の低下、体重増加や身体機能の低下をもたらし、これらの影響により日常生活でのさまざまな活動への意欲が低下するなど、さらなる生活空間や活動の制限に繋がるのではないかと懸念された。

卒業後の生活で手引きが必要になった背景として、利用開始時における施設職員との関係性の希薄さから、力が発揮できなかった、歩行時の動作が不安定に見えるなどの原因が考えられた。

在学時の自立活動の指導では、小学部から継続して歩行の指導が行われ (Table 1)、対象者は歩行に必要な力を習得した。しかし、卒業後の生活でその力を十分に発揮できていない背景には、卒業後の生活を見通したトップダウンの視点の脆弱さに加え、歩行自体が目的となっていたこと、身に付けた力を生活場面に般化させる視点が不足していたことが考えられた。必要な移動を歩行で行っていた点においては在学時に設定した指導目標は適切であったと考えるが、「職員や保護者が安心して見守れる程度の歩行の力」を一層意識して育む必要があった。また、小学部段階からの指導 (Table 1) を振り返ると、立位や歩行などの機能の獲得に重きを置いてしまい、他者とのやりとりに関する力を培う視点が不十分であった指導の実態が明らかになった。

最後に、今回は、卒業一年後の生活の実態から在学時の自立活動の指導の検証を行った。今後は、知的障害者の加齢に伴う変容も含む卒業後の経年変化をどの程度の期間で把握し、在学時の指導目標設定の際の拠り所の一つとするか、検討していくことも課題となる。

(KAIMOTO Tomokazu ICHIKI Kaoru FURUKAWA Katsuya)

自立活動の目標	
小5	○2つのシンボルから好きな教材を選択する。 ○選択した教材の活動場所へ向かう。
小6	○立位でバランスを保持する動作を獲得する。 ○歩行でバランスを崩しそうになったときに、足で踏ん張ったり、一歩前に足を出したり、窓の棧などをつかむ。 ○手と膝をついた姿勢でバランスボードに乗り、揺れに対するバランスの取り方を獲得する。
中1	○4つのシンボルから好きな教材を選択する。 ○選択した教材の活動場所へ向かう。 ○立位でバランスを保持する動作を獲得する。 ○歩行でバランスを崩しそうになったときに、足で踏ん張ったり、一歩前に足を出したり、階段などでは、手をだして手すりなどをつかむ。 ○トランポリンやスイング、ジョーパに乗って揺れることで、上体のバランスを保持することができる。 ○股関節や膝を突っ張らず、ゆっくり歩けて居る。
中2	○立位や座位、屈伏位、膝立ちなど様々な身体の動かし方を体得し、ボディイメージを高める。 ○身体の安定を保ちながら、階段や屋外、障害物を避けながら歩行することができる。 ○椅子や動木などを使い、まよく見てぶつからないようつまづかないように歩行する。
中3	○コミュニケーション機器の操作に慣れる。 ○自分の要求を相手に伝えたり、指示に応じたりするなど対人コミュニケーションを取ることができる。 ○相手の肩を軽くたたくなど、相手が受け入れやすい要求の仕方ができるようになる。(コミュニケーション) ○体のバランスを崩しながら安定して歩ける距離や時間が増える。(健康の保持、身体の動き)
高1	○好きな活動や物に対して視線を向ける、笑顔になる、腕を伸ばす等で意思表示が増える。(心理的な安定、コミュニケーション) ○仲間の行動に視線を向けるなど、自分以外の他人を意識して活動に取り組むことができる。(人間関係の形成)
高2	○教師の「止まるよ」「行くよ」の言葉掛けに合わせて教室間を移動することができる。 ○提示した物に手を伸ばし、握り続けて引っ張ったり、放したりしながら、一つの活動に5分程度取り組むことができる。
高3	○教師のゆっくりした歩調に合わせて、15m程度の距離を移動することができる。 ○机の上にある箱の穴を見て、球を落とさずに入れることができる。

Table 1 自立活動の目標